
とある異端の品質偽装

OX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異端の品質偽装

【Nコード】

N1894Z

【作者名】

OX

【あらすじ】

絢爛豪華な無法地帯、学園都市。

一人の男の妄執が作り上げたこの町で、AIMという価値観が支配するこの街で、AIMを憎む男がいた。

彼はテロリストとなってこの街を変革する。

その先にあるのは、平和か、争いか。

R u n 1

アレイスター・クロウリーという個人が日本を武装占拠して出来た街。

それがここ学園都市だ。

技術水準はきわめて高く、学園都市の外と比べて数十年先に行っている。

と、歌ってはいるが、それが恥も遠慮もない人体実験と、老婦人の秘所のように緩みきった規制によるものだという事を知る者は意外に少ない。

いや、目をそらしているだけだ。

この学園都市の一番の売りは、なんと「超能力」
素敵なお薬と、楽しいお勉強で君も明日からスーパーマン。

実際に生み出されるのは、生まれ持った体質だけで選別されるエリートと、

残り6割の被差別階級（レベル0）だ。

それでもまだ彼らは幸福だ。

この学園都市、技術もトップレベルならば、犯罪もトップレベル。そして落ちこぼれには事欠かない。

世界最先端の先進を謳歌するきらびやかな表側を少し外れた路地裏では、

極貧国と同等の犯罪生存競争が行われている。

そのえげつなさは、もはや人類がどれだけくだらない事に命を張れるか競っているかのようだ。

おまけに、モルモットを欲しがる研究員共は、

好きなだけ捨て子を捨てられるように、制度を作り変えてしまっ
た。

おかげで今やここは日本中の子供廃棄所となっている。
捨てられた子供はどうなったかつて？

ここは人体実験大好き野郎と、犯罪者の街だ。

わけのわからん薬を打たれて、顔が良けりや慰み者。

顔が悪かったら？瓶詰め（ピクルス）にされるだろう。

たまたま使える奴だったら？一生奴隷奉公だ。
あんぶおち

ところで、この「超能力」教育、元々は科学技術を生かした、

記憶術や暗算術、知能開発というお題目が存在した。

この俺、鬼無里きなきて 椛もみじの親父もそんな夢に騙されたアホの一人だ。

ホイホイつられていったら、いつのまにか周囲は、人体実験大好
き野郎ジャック・ザ・リパーの群れだった。

まっとうに研究している奴等はすべて超能力開発の名の元に、
人体をプラモデルにしている連中に駆逐された。

研究成果は握りつぶされ、本人は埋められた。

その「超能力」とやらにしたって、そのレベルは
わけのわからんオカルト的な「AIM力場」とやらの強さで決め
られる。

つまりは、あいつらはわけのわからん薬やら、身体を切り刻んだ
りして、

「AIM力場」とやらが出たら金を与えて祭り上げて拝むのだ。
それがなけりや、空を飛んでいようがウルトラマンに変身しよう
がレベル0だ。

しかもこのレベル制、この学園都市全ての子供に適用され、
レベルが高ければ奨学金が出て、レベルが低ければ露骨に無能扱
いされる。

俺の見たところ、強い能力が出るかは本人の努力ではなく、単に

運なんだが。

拳句、薬を売っても洗脳しても超能力が使えない連中（レベル0）は、

手から火が出る奴等だの、電撃を出す奴等だのが優等生扱いされる場所に丸腰で放り出され。

おまけに、教師は露骨に劣等性扱いし、出来もしない超能力を使っ
つて見せると笑顔で言う。

逆に強すぎる能力を引い^{アタリ}てしまっても悲惨だ。

だいたいハメられて、人質をとられるか弱みを握られ、権力者連中の奴隷にさせられる。

なにしろ、犯罪者が掃いて捨てるほどいる街だ。

優等生やたまたま上手く行った実験素材をハメる人員には事欠かない。

表向きには？

「行方不明」の四文字か、昼は学生夜はアサシンの生活だ。

親父は死ぬ間際に言った。

「俺達はこんな街を作る為に働いたんじゃない」

血反吐を吐きながら。

「これが俺がお前に託す、俺の全てだ。同志の未練だ」

それは親父と同じように、まともに研究が出来ると思っ
てここに
来て、

そして殺されていった異端の学者達の研究成果。

「頼む、こんな悪夢、もう壊してくれ」

いいぜ、その妄執げんそつで、現実あくむを破壊しつくしてやる。
目に物見せてやる、ほえ面かかせてやる。

この街を、鬼無里おにのこなごほしにしてやるよ。

まっ昼間の漫画喫茶にあえぎ声が響き渡る。

誰かがAVでも見ているのだろうか？

夜勤あけで漫画喫茶に眠りに来た、

賢極院けんきょくいん栄は不快そうに眉をしかめつつ、自分の席に向かう。

そこには彼の席で緑色のスーツを着た青年が大音量でAVを見ている光景があった。

「おい、君。ここは俺の席だ」

緑色のスーツを着た青年はくるりと振り向き、表情を変えずに淡々と言う。

「そうだよ、ここで合ってる」

「そうじゃない、ここは俺の席だからどいてくれ。」

それからそんなものをここで流すのはやめる」

青年は、トランプ柄のネクタイを締め、

全身チェスやトランプの柄のアクセサリーでまとめている。

まるで奇術師だ。

「奥さん、奈良がご実家なんスってね。いい家スね。汚職塗れ（モラルハザード）じゃない医者の家系。犯罪履歴は真っ白。あんたも今のところは真っ白だな」

青年は淡々と続ける。

「娘さん、美人スね。岩倉代付属なんスよね。花柄のヘアピン、あんたのプレゼントなんでスよね？ いいセンスだ」

全ては事実だ。賢極院の警戒度が上がる。

「たとえば、そんな可愛い将来有望な女の子が、地図上に存在しない部屋に連れて行かれて、笑顔がなくなるなんて、本当に哀しい事だ。たとえば、父親の見たくない面を見たりして。そうスよね？」

ここまで来て、賢極院は思い至った。

目の前の自分の席で写っているのはAVじゃない。盗撮画像だ。

それも自分が「被験体」を相手に「負荷をかける作業」をしている時の。

青年は足置き台を片手で持ち上げ、賢極院の目の前に置く。

「まあ座れよ。長い話になるかもしれんから」

賢極院はごくくり、とつばを飲んでそこに座る。

「何が望みだ。金か」

「ちよつとしたアルバイトをしませんか？

あなたは、週一でここに来て、「たまたま」自分のUSBファイルと、

「偶然」ここにあつたUSBを間違えて持って帰る。

それを「ちよつとしたミス」で職場の更衣室で落としちまう。

それだけで10万円もらえる。

悪くない話でしょ？」

青年の眼がぎらり、と光りスーツの柄がその動きと混ぜって賢極院に酩酊感を覚えさせる。

AVのあえぎ声とすすり泣き、奇妙なBGMが混乱を増幅させる。

徹夜明けの疲労と、混乱による判断力の低下が、その酩酊感で極限に達する。

そして彼は言ってしまう。その言葉を。

「わかった」

「じゃ、ここにサインして」

言われるがままに彼はサインしてしまう。

それはその「アルバイト」とは全く関係の無い「連帯保証人」となる書類だった。

「あなたが話の解る男でよかった。それじゃ、俺はあなたの前から消える。」

あなたは、毎週金曜日か月曜日、水曜日のどれかにここに来る。

そして、いつもUSBを間違えて持って買える。

さあ、あなたは俺のことを記憶しない」

青年は流れ続けるわいせつ画像を回収し、呆然とする賢極院の横を通り過ぎる。

すべては最初からこの、鬼無里きみなざし 椛もみじの仕込みだ。

賢極院の仕事のシフトから、彼の生活習慣まで調べた上で彼を八めた。

漫画喫茶でAVがながれている、自分の席に知らない男が座っている、

ありえない状況を演出する事で冷静な判断力を奪う。

そして夜勤明けという疲労が極限に達した状況で、家族を人質に重大な選択を選ばせる。

それらの状況を合わせた上で、彼は学園都市の生み出した洗脳技術を使った。

AIM技術の前では見戯とされ葬られた技術で、AIM研究者を破滅させる。

彼の「ささやかな」皮肉だ。

外に出た鬼無里はケイタイを取り出し、電話をかける。

「あ、人材派遣マネジメントさんですか？お疲れさん。鬼無里です。

奴隷君一人ゲットできましたよ。あー、はい、新生塾の。そうそう
研究員。

保証人になってもらいましたから、そうすね、三ヶ月後には仕上が
りそうです。

こっちの用事が終わったら保証書渡しますんで、あ、はい50万。
ありがとうございます。ゴチになります。

じゃ、好きに使ってやってくださいよ。はい、どもっす。ウス、は

い、お疲れさんです」

こうして彼は犯罪者を犯罪者に売って50万円を稼ぎ出した。
電話を切ってメールを打つ。簡潔な文章だ。

<経過報告：ONIより ジェニー製薬様N様へ
S塾の件、情報ルート確保できました。
一月以内には情報送れると思います>

つまりそれは、賢極院のほかにも同様に脅迫された研究員が彼の
仕事場において、

彼らの研究成果は鬼無里に筒抜けであり、
その情報は「外」の企業に売られているということだ。

これら全て、鬼無里が学園都市を破壊するためのテロリズムの下
準備にすぎない。

今は「外」のスポンサーと連携をとり活動資金を集めているのだ。

そんな彼が今なにをしているのかというと、銀行強盗にあっ
てい

る。
活動資金の確認に来たところをATMを使う前にまきこまれたの
だ。

銀行強盗は彼自身ではなく、窓口を狙って銃を突きつけている。

「早くしろ、金をよこせ！こっちにはレベル3の発火能力者がい
るんだ！」

三人組の強盗のうち、一人がにやつきながら手から炎を発する。
店員は怯えながらのたのたと金を袋に入れている。

客は全員伏せている。

「おい早くしろ！」

覆面をした三人組はにやつきながらも怯え焦りつつ強盗をする。彼らが目を離れた一瞬の隙に店員は防犯ブザーを押した。

あつというまに窓口にシャッターが締まり、箱型の警備ロボットが出てくる。

「手ヲ拳ゲ、地面ニ伏セナサイ。10秒以内ニ従ワナイ場合、発砲スル」

「舐めた真似しやがって！」

「おいファイア！なんとかしろよ！」

銃を持った男が窓口のシャッターに発砲する。

「今やってる！とりあえずこいつら倒してずらかるぞ！」

炎がロボットに迫るが、まるでこたえた様子がない。

「シャバゾウが」

ぼそりと、しかしはつきりと聞こえる声で鬼無里が呟いた。

「ああ！なんだと temeエ！もっぺん言ってみるや！」

わざとらしく、ポケットから徽章を出して腕につけ、すでに通報しました、というかのようにケイタイをポケットにし
まっ。

その動作は全く同時で、優雅ささえ感じさせた。

「全く、ジャッジメントは休日だったのによ、シャバい強盗やってんじゃねぞサンピン共が。おらかかって来いよ。逃げんのか？じゃなきゃ俺から行くぞ」

鬼無里はポケットからライターを取り出し、拳銃を持った男に投げける。

顔めがけて投げつけられたライターは投擲の威力により爆発し、男は思わず顔を庇ってしまう。手に持った銃を握ったまま、机を蹴り飛ばし、発火能力者に飛ばす。

机は一瞬で燃やされてしまうが、飛び散った文鎮を掴み、三人目のナイフを持った男の手に投げる。

文鎮は手首にヒットし、男はナイフを落としてしまう。

鬼無里は走りながらナイフを掴み、銃を持った男の首に当て、もう片方の手で銃を男の手の上から握って、発火能力者に向けている。

「チェックメイトだ、投降しろ。それとも早撃ち対決といくか？ ああ！？」

その間にも、鬼無里は銃を持った男の膝を蹴りで落とし伏せさせ、手首に仕込んだ注射でもうろうとさせている。

「ここでイモひけるわけねえだろうが！」

「上等だコラア！」

発火能力者の手に炎が集まったのを見るや、

鬼無里は奇妙な節回しと高低で数字と記号を羅列させる。

「S等号0128乗算4637減算72648AND39274
等号632?f86除算……」

炎はあっというまに勢いを失い、ばらけて散る。

発火能力者は頭を押えてうずくまる。

鬼無里が受け継いだ、演算を妨害する特殊な「歌」だ。

そのリズムや高低、数字を繰り返す歌詞によって、不快感を増大させ、

演算をする集中力を乱すためだけに作られたAIMジャマーのプログラムタイプ。

「んっだこりゃあ……」

「手の内明かすと思うのかサンピンが」

鬼無里はポケットから出した指錠をすでに銃を持っていた男にかけていた。

先ほどまで戦いに手を出せず見守っていた警備ロボットがゆっくりと進んでくる。

<ゴ協力アリガトウゴザイマシ>

「今まで何突っ立ってやがったポンコツ」

鬼無里はロボットを掴むと、発火能力者に投げつけ、拾って背中に何度も打ち付ける。

更には確に間接部を狙って銃弾を浴びせ、ロボットを破壊する。

「悪いな、こうやって使ったほうが使いやすかった。

まだまだ遊べるものはあるな？痛いだろうが、我慢するんだ」

ロボットの破片の仲からアームやHDD、ギアなどを取り出してにやりと笑う。

「解つた、もうやめてくれ！降参だ！」

覆面の奥でナイフ男が悔しげに顔を歪めて指錠にかかる。一転して鬼無里はにこやかな表情になって周囲の客に語る。

「みなさん！強盗は撃退しました。ご安心ください！」

この後、ジャッジメントの支部より応援が着ますので、少々この場でお待ちください！

お時間をとらせて申し訳ありません」

その表情はやりとげた男の顔だったが、

周囲の客からは血に飢えた笑みにしか見えなかった。

客はその暴力に黙るしかなかった。

「おら行くぞ！ちゃっちゃと歩け、あと、そいつは肩を貸してやれ」

鬼無里が追いたて、三人組がふらつきながら銀行を出てゆく。

銀行を出た鬼無里の前に車が止まる。

「ハアイ！ミスタ・ライター。お待ちせしませタネ」

明らかに外国人の男がタクシーを駆ってドアを開ける。

「いや、こちらこそ待たせたな。おい、早く車に入れ」

「ああ……」

強盗たちは意気消沈して車に入る。

「ドライバー、早く飛ばせ。逃走ルートの確保はできてるか？
タフな犯行になる」

「オウライ！アジトまで一直線に迂回して逃げ回りますね。
とりあえずB12地点からは、地下通路なる。そこまででいいか
？」

「ああ、それまでに事情を説明する。おい、もういいぞ。
俺たちはジャッジメントじゃない」

男達の眼に希望が点る。

「ただのテロリストだ」

彼らの奇妙な旅は、始まったばかりだ。

これからどうなるのだろう、そう思いながら強盗の一人、
発火能力者の瞬火またたひごとく五徳は最初の車中で言われた事を思い出す。

「俺はジャツジメントじゃない。ただのテロリストだ」

と言った鬼無里はにやりと笑った後、憤怒の表情で彼らを叱る。

「お前等何シケた強盗なんかやってんだバカが。

いいか、銀行強盗するならあらかじめ警備くらい調べとけバカ。
それから撤退の判断をするなら徹底しろ。

俺に挑発されたくらいで足止めるなバカヤロウ。

それに逃走ルートをちゃんと確保してたのか？

この街の防犯設備をチェックしてたか？

バカが。全部監視カメラに写ってたぞ。

レベル3なんて能力持つてるくせにシャバイヤマ踏みやがって。

もつと金稼ぐ方法なんてあるじゃねえかバカが。

外で放火保険金詐欺とかな。

そもそも、強盗すんなら民家にしとけバカ。

学園都市内で強盗なんざ捕まえてくれって言ってるようなもんだ。
バカが」

強盗たちは、暫くの間、何を怒られているのか解らなかった。

そして理解すると、この男は何者だろう、と思った。

「いいか、俺が金になる能力の使い方ってのを教えてやる。

レベル0だろうとかまわねえ。どんな奴だって何かの役には立つ。

俺についてこい。どうせ学園都市じゃもう指名手配だ」

強盗の一人、ナイフを持っていた男、ふつなおと布津直人が怯えながら質問する。

「あの、俺等どうなるんすか……」

「バカか。とりあえず、逃がしてやるってことだ。

お前等さえよかったら、ほとぼりが冷めるまで匿おう
その後は好きにすればいい」

三人は目で会話する。

すなわち、この男についていっていいのだろうか？と。
銃を持っていた男、かりやがんま雁屋勘馬が聞く。

「なんで俺等を助けるんだ？」

「お前等があまりにもつたいない力の使い道をしてるんでな。
能力だけじゃないぞ？」

銃を手にいれるルート、資金力、強盗実行の手際。
つまりは……実行力だ。

物乞いするよりはまだしも牙がある。
俺はその犯罪力を鍛えてみたくなつた」

ドライバーが陽気に続ける。

「どの道アナタたち、ここで私達から逃げる、どうせポリス捕ま
るね。」

バット、ここで人生の転機、見つける。
それ成り上がるチャンス思わないか？」

思えなかった。とにかく怖かった。
三人はしばし相談しあい、とりあえず逃がしてくれるならそれに乗ろうと決めた。

それから車を変えること5回、船に乗ること2回、
地下道や下水道を歩いた回数、数知れず。
いつのまにやら、鬼無里の仲間が増えて、今や全員で6人の集団
になっている。

ジャツジメントに追いつかれた感覚は、強盗たちには一切なかったが、
鬼無里は時折ケイタイで連絡をとったり、周囲を警戒していた。
実際、強盗たちが気づいていないだけで、危うい場面は何度もあったのだろう。

今は強盗たちは船に乗り、どこともしれない海を後悔と共に航海している。

「おい、逃げようとか立ち向かおうなんてバカな事考えんじゃねえぞ？」

逃げたら即屍けて……スンマセン旦那、屍仮定だ。ハハハッ」

鬼無里の一味の一人がAK47を構えながら野卑に笑う。

「ヴェノム、お前はもう少し上品に喋れ、ちゃんと堅気のシノギ
ができてるのか？」

だが途中で気づいたのはいい傾向だ。軽々しく殺すと言うな、ちやんと覚えてたな」

鬼無里が軽くヴェノムをはたく。

「ハハハ、すんません旦那」

「あまりビビらすんじゃない。おいお前等悪かったな。

「コイツはちよいとばかり気が短いんだ。ドク、治療は終わったか？」

闇医者らしき男が強盗たちの怪我を治療して行く。

「へえ、ちつとばかり痛むかもしれやせんが、大事はありませんぜ」

「そうか」
それきり鬼無里はしばらく黙り、外をじっと見ている。

はるか遠くの敵を睨む弓手のような、登頂する山を見る冒険家のような表情だった。

やがて、強盗たちは車に乗り、目隠しをされて道を歩き階段を登る。

繁華街の騒音、ビルに入った空気、階段を登るたびにまして行く人の気配。

彼らにとっては死刑台の13階段を歩いている気分であった。

やがて彼らは目隠しを外される。

そこには首吊り縄はなかった。

代わりにダンスホールがあった。

スタイリッシュで垢抜けたテーブルやネオン、酒を飲んでくつろぐ若い男女。

明らかに堅気じゃない男達。どう見てもキャバ嬢な女達。

ガンギマリにヤバイ酒場が出現していた。

彼らは素早く帽子を取ると、姿勢を正し75度の角度でお辞儀する。

「お疲れ様です、ボス」

「お疲れ様です、兄貴」

「リーダー、おかえりなさい」

「チーフ、待ってたぜ」

「好久没見了、幫主（オヒサシブリネ、ボス）」

「welcome back sir！」

それに対し、鬼無里は鷹揚にうなずき返し、やがて誰ともなく彼の行く道をあけて行く。

強盗たちはどう見ても堅気じゃない黒服たちに無言で椅子を勧められた。

座るしかなかった。

鬼無里がダンスホールの壇上に上ると、騒然とした雰囲気は徐々に収まり、

大麻だか煙草だかわからないキツイ煙の充満した空間は、荘厳とした沈黙に支配される。

BGMが静まり……鬼無里はマイクを握る。

これから何事が始まるのだろうか？

強盗達と思う。だが、ヤバイ何かというのは確実に解った。

そして、鬼無里の演説が始まった。

「最初に俺はこう言ったな……」

馬鹿でかい家に住んでる奴も道端で転がってる奴も学園都市じゃ等しく不幸だ。

上の奴等が好き勝手に決めたルールの中で競争レースさせられてる」

静かに、遠雷のように重く深く。

「こいつは絶対に勝てない賭けなんだ。

あいつらが甘い汁を俺等に吸わせる気なんて無いんだからな。

今のままじゃ一生這い上がれない仕組みが作られている」

やがて、明朗と。

「搾取されるままでいいのか？

首輪着きの猟犬のままでいいのか？

しみつたれた野良犬のままでいいのか？

俺はお前等にそう問うた」

静かな熱と共に。

「そして、俺は約束した。

お前等の首輪を外し、お前等に牙をやると。

情熱をかけるに値する挑戦をしよう」と

それはもはや遠くに響く軍馬の群れのように。

「お前等に聞こう。

俺は約束を守ったか？」

対するは熱狂。

「ああ！」

「楽しませてもらってるぜ！」

「加油！鬼大哥！」

喚声。それに対し負けぬほどのもはや隠し切れぬ情熱で。

「搾取されるままでいいのか？

このままいい目の見ずに死ぬのか？

お前等は今までバカに寛容すぎたんだ。

ならばどうする！

怒れ！いつまでも従順な犬でいるな！

戦え！権利を勝ち取れ、自由を勝ち取れ！」

それは狂気。狂奔、嵐の如き熱波。

「学園都市を潰せ！アレイスターを引きずり出し、首を掲げよう！」

それは重力。それは黒い太陽。

全てを焼き尽くすような、何もかも引きつけて破壊してしまうような、暴力。

そして聴衆たちが口々にスローガンを叫ぶ。

「アレイスターを殺せ！」

「生かしておくな！」

「自由を！さもなければ死を！」

「俺達は犬じゃない！」

「殺殺殺」

ここで鬼無里は頼るに足ると人々に思わせる笑みで軽く聴衆をなだめる。

「いいだろう。俺は約束を果たした。
お前等に自由と権利を掴むチャンスをやった。
だが、それを掴み取ったのはお前等の意志と努力だ。
降りたい奴は降りればいい、強制はしない。
お前等は幸福を掴む権利があり、その権利を行使すればいい」
それは慈悲深く、静かに。

「だが、次の挑戦を俺と共にしてくれるならば、
今度は世界を変革する権利をお前等チャンスにやろう！
牙を研げ！復讐の準備をしろ！
お前等とならばそれができると俺は信仰している」

気がつけば、強盗たちは熱狂の渦に入り、聴衆と共に絶叫して
いた。

「牙を研げ！」

「牙を研げ！」

「革命！革命！革命！」

「次の挑戦を！さらなる試練を！」

学園都市からはぐれた狂気は、静かに熟成されていた。
そして、そこに新たに三人が加わるのも、遠くないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1894z/>

とある異端の品質偽装

2011年12月11日22時58分発行